

異文化理解研修（ロシア）参加者レポート 2011

総合政策学部 2年 中田 寛太

ロシアで過ごした1か月間は、毎日が勉強の日々でした。平日は、午前中に授業を行い、午後は街に出て市内を見学するのが毎日の日課になっていました。授業で習ったことを、その日のうちに街に出て実際に使ってみる。街で知らない言葉を見つけたら寮に帰って調べる。休日は一日中街を散策する。基本的にこれを繰り返す日々でした。

ロシアでは自分で自由に行動できる時間がとても多かったので、街に出て自分が興味を持った所に行く機会がたくさんあり、行った場所では、そこでしか得られない発見がたくさんありました。その数々の発見の中で、僕がロシアという国に対して持っていたイメージは大きく変わりました。その一つは、ロシアでは思ったより日本の文化が入り込んでいくということです。日本の車・バイク、食、製品など、あらゆるところで日本のモノを見つけることができ、そしてどれも大きな人気を誇っていました。寿司バーはいたる所があり、日本製品だけが売られている店もたくさんありました。ロシアでは思った以上に日本という国が受け入れられているということを知り、ロシアに対して親近感を持つことが出来ました。

最初にウラジオストクに到着した時に目に付いたのは、多くの工事現場でした。ウラジオストクでは2012年にAPECが開かれるため、街にいたるところで工事が行われていました。古い建物は取り壊され新しく建て直したり、道路は舗装し直されたりしていました。そのために、道路は穴だらけで歩きにくく、通れない場所や、狭くて歩きづらい道もありました。しかしながら、それでもウラジオストクはとてもきれいな街であったと思いました。そして、ロシアでの研修も終わりを迎える頃になると、現地での生活に対して完全に慣れていくことに気が付きました。研修を始めた頃は、日本と大きく違う生活環境に戸惑いを感じていました。お湯は出ず、黒パンや飲み物はあまり口に合いませんでした。しかし、生活をしていく中で徐々にそのような環境にも適応することが出来るようになり、ロシアでの生活がとても楽しいものになっていきました。

■研修の様子

